

# 特報部

FAX 03 (3595) 6911 Eメール tokuho@chunichi.co.jp

コロナに感染し、留年の危機にある東大の男子学生―都内で



新型コロナに感染し、講義を休んだら補講を認められず、単位不認定で留年に一。東大の男子学生(19)がそんな状況に陥り、困惑している。大学側は感染による欠席だけが不認定の理由ではないと主張するが、男子学生が救済措置を求めた後、評点が大幅に下がる不自然さも。東大は定期試験でも感染者らを対象にした補講などの特別措置を撤廃している。感染拡大の第7波の中、学生を苦境に追い込んでいないか。(北川成史)

## 感染し単位不認定 東大生留年危機

### 異議申し立て後、不可解な減点

男子学生は教養学部前期課程(教養課程)二年。地方出身で、都内で一人暮らしをしている。春学期前半の五月、三九度以上の高熱や呼吸困難の中等症以上の重い症状に。ワクチンは二回接種済みだったが、PCR検査で陽性。自宅療養になった。朦朧として食事も取れず、一週間以上ベッドで苦しんだ。

この結果、必修科目「基礎生命科学実験」のオンライン講義を全六回中二回受けられなかった。「経験のないつらさで頭が回らなかった」という男子学生。担当教員への連絡は一回目の欠席後、症状が和らぎ始めてからになった。自宅待機終了後に診断書を送ると説明し、コロナ感染でやむを得なかった二回の欠席への補講措置を申し入れた。

教員は一回目の欠席の補講だけ認めると返信。男子学生はこの補講の課題を提出したが、六月十七日の春

学期前半の成績発表で「不可」と通知された。来年度、専門課程に進めず、同科目の履修のためだけに留年になる。男子学生は過失のない感染を考慮した措置を教員に要望。教員は学部とのやりとりを指示し、時間の経過などを理由に診断書の受理を拒んだ。男子学生は学部長ら宛ての内容証明郵便で「欠席には正当な理由があり、代替措置を講じて不利益を及ぼさないように配慮してほしい」と異議を申し立てた。学部長らは返信で「特段

#### 男子学生のコロナ感染を巡る経緯

5月17日	高熱や呼吸困難で講義欠席。翌日コロナ陽性
24日	2回目の欠席
25日	担当教員に感染をメールで連絡
6月17日	成績発表で不可。教員に配慮求めるメール
19日	教養学部長らに内容証明郵便
24日	成績再発表で減点
27日	学部長らから特段の対応しないと返信文書
7月28日	アカハラを扱う学内組織に申告

### 「理不尽な対応 納得できない」

の対応はしない」と通告。一回目の欠席について「一週間以上連絡がなかった」として補講をしない正当性を主張し、「その他の提出課題の内容から、出席しても成績は不可」と説明した。しかし、男子学生は不可に至るほどの提出課題や授業態度に覚えがなかった。

加えて不可解だったのが、異議申し立て後、学部長らの返答前に成績が再発表され、履修科目全体の平均点が下がっていた点だ。基礎生命科学実験での下方修正と分かり、計算すると約十七点の大幅減だった。学部長らの文書などで、減点理由は説明されていない。

不可は評点四十九点以下なので、十七点の減点があると最高でも三十二点。同科目が「可」(五十一~六十四点)だった同級生(七)は「自分も同等の欠席や課題の未提出、期限超過があったのに、評点は彼の約一・五倍。差があり過ぎる」と訝る。男子学生の相談を受けた、内閣法制局に勤務経験がある大学教授は「異議申

立人の評価を下げる『不利益変更』は、法令上も社会通念上も原則禁止だ。男子学生の留年を欠席以外の理由で固定化するため、成績を改訂した可能性が高い」と問題視する。

男子学生は「落ち度のない感染への理不尽な対応で到底納得できない」とアカデミックハラコメントを扱う学内組織に申告した。

教養学部は「こちら特報部の取材に「特定の学生の成績評価には答えられない」としつつ、同科目は集団指導体制で、単独の教員による恣意的な成績評価はできないとの立場を示した。

「男子学生の症状は不可欠な検討要素なのに診断書を受理せず、減点の疑問にも答えていない」。NPO法人「医療ガバナンス研究所」の上昌広理事長は、母校・東大の対応が非合理的で不当だと批判する。「大学は学生の教育を受ける権利を守り、損なわれたら保障するのが当然だ。感染の苦しみへの配慮もない。一体どこを向いているのか」

「F」の追跡